

少女小説における結婚と主人公の選択
—『リンバロストの乙女』の場合—

Marriage and Choices of Heroines in Girls' Fiction:
The Case of *A Girl of the Limberlost*

土 屋 志 織
Shiori TSUCHIYA

日本女子大学大学院紀要
家政学研究科・人間生活学研究科
第 24 号

少女小説における結婚と主人公の選択

—『リンバロストの乙女』の場合—

Marriage and Choices of Heroines in Girls' Fiction:
The Case of *A Girl of the Limberlost*

土屋 志織*

Shiori TSUCHIYA

Abstract This paper examines the relationship between the various female images represented by each character and considers the ultimate choice Elnora, the heroine, takes in Gene Stratton-Porter's *A Girl of the Limberlost*. The nature and the way of life of women typified by each character are presented to Elnora. Initially, she seems to be an ambitious intellectual figure, but eventually leads herself to the ideal wife / mother image as "the Angel of the House". At the point of the change, two female types play important roles: Bird Woman, a pioneering female role model, and "society wife" Edith, as opposed to Elnora. Referencing the ideal female image at the time of publication, this paper examines the kind of female image presented to the heroine Elnora. Finally, the paper concludes that a new female image is established as the third choice in this story.

Key words: Gene Stratton-Porter ジーン・ストラットン・ポーター, Girls' fiction 少女小説,
The Angel in the House 家庭の天使, Marriage 結婚

はじめに

この論文は、ジーン・ストラットン・ポーター (Gene Stratton-Porter 1863-1924) の作品『リンバロストの乙女』 (*A Girl of the Limberlost* 1909) を題材とし、登場人物たちに描かれる多様な女性像と、主人公エルノラの迎えた結末との関連性について考察する。

作品はアメリカ中西部インディアナ州の北西部に位置する沼地、リンバロストを舞台に、同著者の『そばかすの少年』 (*Freckles* 1904) の数年後の世界を描く姉妹編となっている。『リンバロストの乙女』の主人公エルノラは、『そばかすの少年』の主人公そばかすが森に残した部屋で蛾や蝶を採集・標本化

し、それらを売って学費をまかなう少女である。作品間には共通の登場人物が現れる。『そばかすの少年』における重要人物である鳥の研究家バード・レディと、そばかすの恋人となるエンジェルは、『リンバロストの乙女』でもエルノラに多大な影響を与える存在である。物語には彼女たち二人や実の母親キャサリンを含めた多様な女性登場人物が現れる。エリザベス・フォードは彼女たちが、著者ポーターが表現したエルノラの成長に関わる "various method of mothering"¹⁾ であると述べる。エルノラの前には、それぞれの人物によって典型化された女性の性質や生き方が提示される。当初、彼女は大学へ行くことを望み、バード・ウーマンの後継者としてナチュラルリストを志向する野心的な姿を印象付けるが、最終的にエンジェルの提示した「家庭の天使」としての妻・母親像へ自らを導き、愛する男性との結婚が示唆された結末を迎える。彼女の迎えた「幸福な結末」が、多様な女性人物が提示したその選択肢の中から

* 日本女子大学大学院 人間生活学研究所 人間発達学専攻 (博士課程後期)
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Science, Japan Women's University

選び取られたものだと考えると、その転換はどこで行われたのだろうか。そこには、もともとのロールモデルであったバード・ウーマンの存在の特異性と、婚約者となるフィリップの元婚約者、エディス・カーの存在が深く関係していると考えられる。彼女はエルノラの対照に位置する存在であり、エディスとエルノラの迎えた結末はこの物語が提示した二つの女性像の結末として読むことができる。

本稿では、出版当時の理想の女性像と照らしながら、作品中に登場する女性人物たちが主人公エルノラにどのような道を提示し、選択させたのかについて考察する。その結果、物語には第三の選択肢としての新たな女性像が生まれたと考え、論じる。

1. 二つの「母親」像

作品は、16歳の少女エルノラを主人公に、美しい蛾、鬱蒼として危険な沼地という、ポーターの経験に基づく独創的なモチーフを中心に物語が展開する。主人公エルノラ・コムストックの周りには、個性的な女性登場人物が多く登場する。特にエルノラと重要な関わりを持ち、影響を与える女性は、実母キャサリン・コムストック、隣人の代理母マーガレット・シントン、バード・ウーマン、エンジェル、そしてのちに婚約者となるフィリップ・アモンの元婚約者エディス・カーである。ここでは、エルノラの成長においてモデルとなる女性像が、序盤から中盤にかけてどのように変化していくこととなったのかについて考察する。主に、キャサリンとバード・ウーマンの存在について注目する。

エルノラは、母との確執から精神的にも経済的にも支援を得ることができず、蛾の標本をバード・ウーマンに売ることによって学費を工面している。バード・ウーマンは世界中に繋がりを持つ研究者・写真家であり、エルノラは彼女に続く女性として、すなわち自分の興味や勉学を追求する野心的な女性をめざす様子が強調して描かれる。バード・ウーマンは目標に向かって一途に努力を続ければ歴史に名を残すことも可能であると説き、エルノラは彼女の手伝いをし、多くの知識を得て、大学へ進学する夢も抱く。読者はエルノラが自分の夢を叶えて大学に入学し、大志を抱いて勉学に励む様子を期待するだろう。しかし、物語中盤に大きな転換点があり、そこからエルノラにとっての「目指すべき姿」が大き

く変わっていくのである。その転換点が、母キャサリンとの和解である。

キャサリン・コムストックは、娘のエルノラに精神的苦痛を与え続ける“evil mother”²⁾として描かれる。そのため、エルノラはキャサリンから母親らしい愛情を与えられたことがなく、のちにエンジェルが提示するような「家庭の天使」的女性像を知らずに成長していく。キャサリンが囚われていたのは、亡き夫への哀情である。沼地にはまり、沈んでいく夫を助けようとしたとき、エルノラを妊娠していたキャサリンは産気づいてしまい、夫の死の原因となってしまったエルノラを憎んでいる。しかし、長年隠されてきた夫の不貞の露呈によってキャサリンの目が覚め、母娘は確執を解消する。もともとキャサリンは女手一つで土地を守り、畑仕事をし、料理や裁縫の腕前も認められている女性である。亡き夫の持ち物や部屋も大切に整え続けており、夫を愛していたが故に歪んでしまっていたが、本来は妻として素晴らしい素質を備えていた。

エルノラは父親の真実を知らないままであるが、亡くなった夫への愛情が結果家庭の不調和を生み出していたコムストック母娘は、「良き妻良き母」の矛盾を読者に印象付ける。バーバラ・ウォルターが、1820年から1860年代、つまりキャサリンが育ってきたと考えられる年代に“True Womanhood”として価値が置かれていた女性の美徳は“piety, purity, submissiveness, and domesticity”³⁾であった。キャサリンはこの全てを備えているにもかかわらず、彼女の夫は家庭を裏切った上にこの世を去り、そのせいで娘との間には深い軋轢が生まれてしまっていたのだ。上記の美徳を備えた「良い妻、良い母」であれば女性は価値ある存在であり、安泰だとされた従来の価値観とこの母娘の現実には矛盾が生じていた。

その後キャサリンは家庭物語の伝統に則るような、娘を愛し支える理想的な母親へと姿を変え、母娘関係は再構築される。彼女の変化は依然として家庭内の役割のみにとどまるが、それでも20年間注意を向けようとしなかった自分の預金を確認し、その総額に驚き、それらを使ってエルノラのために衣類や住まいを整えるようになった彼女は、夫の幻影を捨てて自立という道を選んだのだと言える。

しかし同時に、母娘の和解のきっかけとなった出来事により、エルノラの学費のための標本コレク

ションは壊滅し、大学入学へ一年の延期を余儀なくされる。その期間に、エルノラは将来の夫となるフィリップ・アモンに出会い、エルノラは、彼の妻になることを望むようになる。家庭を守り、夫と子どもに献身的な「家庭の天使」的的女性像へと、自らの方向性を転換させていくのである。つまりエルノラは母親と和解することによって、「家庭」に対して抱いていた苦痛や違和感を乗り越え、自身もあたたかな家庭を作り出すことのできる基盤を固めた。そしてそのことと引き換えに、破壊された蛾に象徴される自己実現の野心を少しずつ失っていくことになるのだ。なぜ、この転機に蛾が破壊され、エルノラの向学心と家庭性が引き換えにされなければならないのか。これらは彼女の中で共存することはできなかったのだろうか。この理由として、エルノラの野心的モデルであるバード・ウーマンの存在の特異性に注目したい。

バード・ウーマンは“second surrogate mother”⁴⁾としてエルノラを支え、知識と経済的な支援を与える存在として描かれる。そして彼女は、幼い頃から豊かな自然に囲まれ、鳥や蝶、蛾に興味を抱き、鳥類などの写真を撮ってコラムを書いていた著者ポーターの姿に重なる人物である⁵⁾。そのためか、彼女は他の女性人物たちにはない特徴がある。第一に、バード・ウーマンが物語中“the Bird Woman”とのみ呼ばれ、本名についてはもちろん、容姿についての描写もほとんど見当たらないということである。そして、彼女は“Ms.”、“Mrs.”の肩書きを持たない唯一の人物である。夫や家族についての言及はなく、家庭におけるジェンダー・ロールとも無縁な存在である。彼女はただ“the Bird Woman”なのであり、どこにも所属せず、家族もなく、地域の人々と関わり合うこともせず、“Identified by her interest—birds—and her female gender, not by a title”⁶⁾という特殊な扱いを受けている。他の女性登場人物たちが、家庭に関する何らかの肩書きを持つ中で、彼女だけがそれら繋がりから切り離された存在であると言えるだろう。また、エリザベス・フォードは、バード・ウーマンが物語の鍵を握る重要な登場人物であるのにもかかわらず、書籍の登場人物一覧に名前が記載されていないことについても言及している⁷⁾。

物語という「現実世界」において、どこにも繋がりのないバード・ウーマンがこのような扱いを受けていることについて、その一つ一つが彼女の存在の

非現実的な架空性を表していると捉えることが可能だと考えられる。つまり、彼女は登場人物の一人でありながら、一段上の作者に近い視点からエルノラに助言をし、援助をする立場にいる。大役を任せられた式典において着て行くドレスがなく、絶望していたエルノラの目の前で魔法のようにドレスを作り上げ、誰よりも美しく洗練された姿に仕立て上げた様子は、まるでフェアリー・ゴッドマザーのようである。そして何より、バード・ウーマンは自身の興味を追求して野心を持つ自立した女性の象徴であり、エルノラにとって目指すべき姿の選択肢の中の一択であったが、そこには現実性が伴って描かれていなかった。そして、家庭的役割も持たされていない。つまり、主人公エルノラを若い女性読者にとってお手本にすべき女性として描き、なおかつ幸福な結婚を迎えるにあたり、この物語において非現実的な存在として描かれるバード・ウーマンに続く女性として、後を歩ませることは不可能だったのだと考えることができる。

ポーター自身は1886年に銀行員のチャールズ・D・ポーターと結婚し、1888年にはエンジェルモデルであるとされる⁸⁾一人娘ジャネットを出産している。しかし、ポーターの伝記を著したパートランド・F・リチャーズは、彼女自身の「現実」について“more beloved by her readers than by her associates in her community in apparent”⁹⁾、その理由として“she imposed on herself such a schedule that she had little time for social amenities”と述べている。彼女は自らの家庭生活を始めた当初、完璧な家事や子育てを自身に課していたが、これらは自然の観察や執筆作業の合間の時間のみに許されていた。ポーターは地域の女性たちから、彼女の自由が許される豊かさへの嫉妬と、“the spirit of the woman who dared pursue her own goal in the face of convention”¹⁰⁾への羨望を向けられていた。フォードはバード・ウーマンとポーター自身について、“Although she is well-to-do and knowledgeable, the Bird Woman is an isolate . . . Perhaps this is a parallel with Stratton-Porter’s life”¹¹⁾と述べている。

エルノラは後に婚約者となるフィリップ・アモンの登場により、バード・ウーマンとは異なるロールモデルを見出すが必要になる。それをいかに見出し、自身の選択につなげたかについて、次節で考察する。

2. 二つの「妻」像

エルノラの前に現れるのは、エンジェル（テレンス・オ・モーア夫人）とエディス・カーの二人の女性である。エルノラはバード・ウーマンの提示する道を進もうとするも、彼女は孤独とともにある特殊で存在し得ない女性像であり、結婚という少女小説の典型的で幸福とされる結末を迎えるため、別の道を模索する。ここでは、そんなエルノラに彼女たちが提示した良き妻像と、良き妻像を引き立たせる悪い妻像について述べる。

エルノラは、シカゴから病後の療養のため近隣の町オナバシヤに滞在しているフィリップ・アモンに出会う。好青年の彼はすぐに母娘を魅了するが、彼にはシカゴに幼い頃から結婚を約束した婚約者、エディス・カーがいた。エディスは周囲の娘たちよりも美しく、良い服装をすることに心を注ぎ、感激、買い物、訪問、パーティーなど、自分を愉しませ甘やかすものに興味を持つ娘である。フォードは、エルノラ（Elnora Comstock）とイニシャルを共有するエディス（Edith Carr）は、エルノラの“evil avatar”¹²⁾だと指摘する。エディスの幼さを聞いて驚くエルノラは、フィリップに以下のように告げる。

I would have to be well acquainted with her to know, but I should hope so. To make a real home for a tired business man is a very different kind of work from that required to be a leader of society. It demands different talent and education. Of course, she means to change, or she would not have promised to make a home for you.¹³⁾

前述したように、エルノラはここに至るまでは大学へ入学し勉強することを目標に蛾の採集を続けてきており、彼女の発言や行動において自分が結婚して家庭を持ち、夫を支えることに関して意思的なものは描かれていない。むしろ、大学入学までの期間に教職を得て、自分の学費のための採集の手伝いをフィリップにさせるという自らの野心的活動に精力的なエルノラが突然この発言をすることには不自然さが伴う。しかし、エルノラには自身の進むべき道を新たに見出す必要が生じるのだ。なぜなら、このエディス、およびフィリップの妹を含めた「エディ斯的」な“strictly ornamental girl”¹⁴⁾像に

より、エルノラの夢見ていた大学は“place to learn bridge and embroidery; not to mention midnight lunches of mixed pickles and fruit cake, and all the delights of the sororities”¹⁵⁾と定義づけられてしまうからだ。すると途端に、リンバロストの自然と今までの生活の辛酸から多くを学んできたエルノラには必要ないものだとされ、価値を失ってしまう。

エルノラは田舎暮らしのつましい自分の暮らしと、都会暮らしの派手なエディスの暮らしを、言外に何度もフィリップに比較させる。前の引用部分でエルノラが提示した、妻が働いている夫のために求められる社交界のリーダーとしてのものとは違う働きという比較は、作品を通してポーターが提示したとフォードが述べる“good” and “bad” mothering”¹⁶⁾につながっていると考えられる。その良い働きについての内容が、以下に引用した後のエディスとの対話の中で明らかになる。

What he asked of me was that I should be his wife. I understood that to mean that he desired me to keep him a clean house, serve him digestible food, mother his children, and give him loving sympathy and tenderness.¹⁷⁾

これは、19世紀半ばのアメリカにおいて求められた女性の美德を体現しているような内容であり、ウォルターは“Woman was expected to dispense comfort and cheer”¹⁸⁾と述べている。これらは女性の雑誌やギフトブック、宗教読本などによって提示された価値観であり、最も重要視されたのは「献身」であった。まさに、エルノラがエディスに語る妻の役目である。

エルノラの新たな道を決定づけるのが、彼女の前に現れた『そばかすの少年』の主人公そばかす（テレンス・オ・モーア）の妻、エンジェルである。エンジェルは夫を愛し、子どもを育て、大家族を夢見る“the archetypal angel in the house, a mother for whom motherhood is all”¹⁹⁾である。「エンジェル」という名は彼女の本当の名前ではなく、そばかすがつけたニックネームである。前作から続いて彼女の本名は明かされず、名前がないという点においてはバード・ウーマンと同様だ。しかし本作では彼女に「テレンス・オ・モーア夫人」という肩書きが与えられており、しっかりと一家庭に属する夫人としての役割を担ってい

る。そんなエンジェルの姿は、少女を主人公とした物語において文句なしに素晴らしい理想の女性像である。ジーン・ラハイエは、ポーターと同時代の少女小説について以下のように述べている。

Up until the latter half of the Victorian era, children's literature was often extraordinarily conservative, and most texts encouraged girls, in particular, to embrace traditional Victorian roles which included motherhood. Toward the end of the Victorian era and into the Edwardian, an increasing number of authors managed to write subversive texts that presented a different kind of woman²⁰⁾

この“different kind of woman”はまさにバード・ウーマンに当てはまる先駆的な女性像であると言えるだろう。しかし、当時は子どもと夫のために尽くす、献身的な女性が理想とされた時代の影響が残っており、家庭重視の保守的なイデオロギーが存在した。ポーターは物語序盤、エルノラをバード・ウーマンに続く女性として描くものの、彼女の恋愛を成就させ、結婚という道を歩ませるにあたり、良い妻良い母というエンジェルをロールモデルとして描く結末を選んだ。エルノラは、エンジェルとそばかすの家を訪ねた際に、暗い部屋の中で眠る子どもたちをろうそくの光の中で一人一人紹介される。その姿は母親としての充実と喜びに満ちており、フォードは“Elnora's fascination with nature, her persistent studying, her resourceful hard work, her musical gift, all fade in this dark room where her future becomes clear”²¹⁾と述べている。そしてその選択が当然であり、またエルノラを主人公にふさわしいことを示すよう「悪い妻」としてエディスを描いて対比させ、読者に受け入れられやすい女性像を作り上げたのではないかとと言える。

3. 二つの「幸福な結末」

エルノラには「良い妻」「悪い妻」としてのモデルが提示され、家庭の天使的なエンジェル型の女性像へと続く道を辿り、フィリップ・アモンとの結婚という結末を迎える。一方、フィリップとの婚約が解消され絶望したエディスには、ずっとそばで彼女を見守っていたハート・ヘンダソンという崇拜者が

おり、彼と共に新たに生まれ変わるまでが丁寧に描かれている。ここで最後に考察したいのは、この小説にはエルノラとフィリップという主役二人の「幸福な結末」に付随して、エディスとハートによって表現される新しい女性像、および結婚像が提示されているのではないかということである。

物語の終盤は、婚約破棄されたエディスとハートがプロットの主軸となる。何もかもを与えられ、婚約者だったフィリップも思い通りに動かすことができていたエディスは、失恋の傷を癒す中で自らを省みて、そばで彼女を支え続けるハートの広い心と深い愛情に気がつく。ハートがどんなに大切な存在であるかに気がついたエディスは、彼に思いを告白する。そうして改心を誓う彼女は、フィルの選択が正しかったこと、そしてハートに今後自分が目指すべき妻像について以下のように語る。

I planned to finish life as I started it with Phil; and you see how glad he was to change. He wanted *the other sort of girl* far more than he ever wanted me . . . Would you rather have a *wife as I planned to live life with Phil*, or would you rather have her as *Elnora Comstock intends to live with him*?

If you could have your choice you wouldn't have a *society wife*, either . . . I'll be *the other kind of a girl*, as fast as I can learn.²²⁾ (強調筆者)

“the other sort of girl”, “the other kind of girl”と、エディスは女性の型を強調した発言をする。その別の種類の女性とは、“as Elnora Comstock intends to live with him”であり、彼はエディスのような“a society wife”を選ばなかったことを喜んでいると言う。ポーターはエルノラを若い女性読者のための主人公として理想的だと設定し、優位な存在として際立たせるため、エディスを対照的に華美で非家庭的な「社交界の妻」として位置させた。そしてポーターの意図通り、当時のブックレビューにおいて“recommended for older girls”²³⁾と評され、エルノラは“lovable young woman”²⁴⁾、“gains the reader's sympathy”²⁵⁾と述べられている。しかし、それはポーターによる時代に沿った表向きの意図であり、エルノラの軌道変更を受け入れられやすくする形をとった結果なのではないかと考えられる。なぜなら、エルノラを選択が本心のものか疑問に思えるような、エンジェルの型に

はまることを拒否するような発言が見受けられるからである。以下が、そばかすとエンジェルのマキナックの家に滞在中のエルノラが、マキナックについての印象を聞かれた際の返答である。

Oh, it is a perfect picture, all of it! I should like to hang it on the wall, so I could see it whenever I wanted to; but it isn't real, of course; it's nothing but a picture. . . .

They know this, and they love it; but you and I are acquainted with something different . . . Here it is a carefully kept park . . . But what I like is the excitement of choosing a path carefully, in the fear that the quagmire may reach out and suck me down; to go into the swamp naked-handed and wrest from it treasures that bring me books and clothing, and I like enough of a fight for things that I always remember how I got them . . . I like sufficient danger to put an edge on life. This is so tame.²⁶⁾

はらはらするような危険を冒すことを好むエルノラの世界観は、これから自分が作り上げることとなる世界と相反するものである。その象徴であるあたかな家庭を中心にしたエンジェルの世界をはっきりと「異なるもの」だと言い、“a carefully kept park”, “so tame”だと表現する。彼女にとってはエンジェルの世界こそが非現実的であり、自分の選択した良き妻としての世界にそぐわない情熱を、依然として抱いている。それらは蛾であり、蝶であり、禿鷹やガラガラヘビの危険さえも含めたリンバロストの沼地に属するもの全てに象徴されている。どんな具合に手に入れたか忘れないようにものを闘い取るのが好きだという彼女にとって、フィリップもエディスとの戦いの末に手に入れた存在だったのではないだろうか。それを裏付けるように、フィリップがエルノラの元へやってきたとき、彼女はついに“she[Edith] had acknowledged defeat”²⁷⁾ということを知ってフィリップのプロポーズを受け入れることを決めるからだ。アン・オールストーンは『赤毛のアン』シリーズのアンや『若草物語』シリーズのジョーを例に挙げ、与えられた自由の中で冒険をした末に、家庭的役割に戻って行くヒロインたちについて以下のように述べている。

The heroines are allowed to dream, and are perhaps even given the freedom to experience temporarily a more independent life, but then they are dragged back into a world of self-sacrifice as they are plunged into domesticity – and this, we are told, makes a happy ending.²⁸⁾

そしてエルノラも彼女たちと同様、自分の情熱を犠牲に「ハッピーエンド」を迎える典型的な一人となってしまう。

一方のエディスには当然激しい自己否定が襲い、彼女はその中で自らの葛藤と対峙する。利己的さ、我儘、野心、美しさと社会的地位を最も貴いものとする考えが彼女をここまで連れてきた。そうして彼女もまた、ハートへの愛のために“the smaller home of comfort, the furtherance of your ambitions, the palatable meals regularly served, and little children around you”²⁹⁾というエンジェル型の女性像を意識する。そして同時に、それが彼女にとっては無理な変化を強いる形となり、ひどく窮屈で退屈であることを自身で認識している。彼女の選択には苦渋がともない、ハートはそんな彼女の姿を見て、自らも彼女のより良い人生のために変わることを宣言する。その瞬間に、二人の目の前でエルノラが学費のために追い求めていたコレクションの最後の一匹、黄色の帝王蛾が羽化し始めるのだ。これは向学心、リンバロストの森、バード・ウーマンなど以前のエルノラを形成していた全てを象徴するものであり、エディスから勝ち取ったフィリップと引き換えにエルノラが手放したものである。エルノラがこの蛾を欲していることを知っていた彼女は、ハートが止めるのも構わず、変わると宣言した通りエルノラに手渡すために拾い上げる。しかし、フォードが指摘するように、彼女が持っていた時にエルノラはすでにフィリップと結婚すること、“it also suggests that she too will become an angel mother”³⁰⁾を決めているという皮肉な結果となっている。ここでさらに興味深いのは、蛾を止まらせ、エルノラの家に向かって通りを歩くエディスの様子に町の人々が驚き、惹きつけられ、彼女たちの後を追って小さな行列ができるという描写である。エディスはハートに

I am proud that we are taking it to be put into a collection or a book. It seems like doing a thing worth

while. Oh, Hart, I wish we could work together at something for which people would care as they seem to for this. Hear what they say! See them lift their little children to look at it!³¹⁾

“Oh, Hart!” she cried. “Let’s work! Let’s do something!”³²⁾

と話す。自らの人生を見つめ直し、人の役に立つ仕事をしたいという人生の抱負を語るエディスは、当初ポーターが描いた向学心に溢れた野心的なエルノラの姿に重なる。そして彼女は、ハートというパートナーも巻き込み、新たな何かを見出そうとする。その姿は非常に好意的に描かれ、ポーターは周囲の女性たちと違う立場に身を置き社会的に孤独だったバード・ウーマン像とも、家庭内においてのみ役割と生きがいを見出すエンジェル像とも違う、新たなモデルを作り出したのではないかと語る。彼女の後に続く小さな行列は、その女性像に人々が魅せられ、続く者が現れることを暗示している。

エルノラとフィリップは、時代のイデオロギーに沿った幸福な結婚を迎え、物語の主軸となる結末を飾っている。その一方で、エルノラが主人公として迎えることができなかった選択肢の末の結末を、“evil avatar”としてのエディスとハートが迎えており、物語そのものは受け入れられやすい形を取りながら“different kind of woman”の可能性を提示している。エディスは確かにエルノラの善を引き立たせる役割を担っていたが、どちらも勇気ある強い女性であり、大団円を思わせる結末においては新しいエディス型も含めた多様な女性像を肯定している。また、リチャーズが指摘するように、エルノラとエディスが正反対に位置するのと同様、病弱で育ちの良い知的なフィリップと“wild”で“man of the world”という印象を与えるハートも対になって描かれている³³⁾。フィリップが社会的地位を重んじる自分から素朴なあたたかい家庭像を求めるように変化する一方で、ハートはエディスとともにフィリップと同様の理想を抱く従来の自分からさらに変化することを宣言する。彼らもまた、ポーターの手によって肯定された男性像である。

おわりに

『リンバロストの乙女』において、主人公エルノラの前には多様な女性像が提示され、その中から時代の価値観に沿った「幸福な結末」を彼女は選び取る。少女小説において重要なのはその分かれ道の最たるものである結婚の描かれ方であり、エルノラは少女から娘へと成長する過程でフィリップに出会い、自由なバード・ウーマン型女性から「家庭の天使」エンジェル型へのロールモデル変更を選択した。そうしてリンバロストの沼地と蛾や蝶に象徴された、外側へと向けられていた彼女の関心は夫と家庭に向かう。一方、本来劣位な比較対象として存在させられていた恋敵のエディスが、自らを省みの中で社会へと興味を向け、いきいきとした姿を見せ始める。エディスはエルノラの情熱を受け取り、従来の価値観に縛られていた自分から変わることを宣言したハートと共に、後ろに列を作りながら第三の選択肢の存在を体現する。

この結末を意識すると、物語の冒頭の登場人物紹介に合点がいく。それは以下の通りだ。

ELNORA, who collects moths to pay for her education, and lives the Golden Rule.

PHILIP AMMON, who assists in moth hunting, and gains a new conception of love.

EDITH CARR, who discovers herself.

HART HENDERSON, to whom love means all things.³⁴⁾

エディスは単なる恋敵ではなく、財産や名声、美貌にこそ尊いものだと確信し幸福な結末を迎えられと信じていた女性たちの象徴であり、彼女たちは本来の「自分を見つける」ことで新たな結末を選択することが可能だと表現する存在である。ポーターは、エルノラとフィリップというある種見慣れた幸福な結婚の裏で、エディスとハートというもう一つの結婚観を提示したのだ。

〔要約〕

アメリカの女性作家ジーン・ストラットン・ポーターの作品『リンバロストの乙女』を題材とし、登場人物たちに描かれる多様な女性像と、主人公エルノラの迎えた結末との関連性について考察した。エ

ルノラの前には、それぞれの人物によって典型化された女性の性質や生き方が提示される。当初、彼女は大学へ行くことを望む向学心に溢れた野心的な姿を印象付けるが、最終的に「家庭の天使」として理想的な妻・母親像へ自らを導いていく。その転換の要因として、先駆的な女性のロールモデルであるバード・ウーマンと、エルノラと対照的な「社交界の妻」エディスの存在を挙げて論じた。出版当時の理想の女性像と照らしながら、作品中に登場する女性人物たちが主人公エルノラにどのような道を提示し、選択させたのかについて考察し、物語には第三の選択肢としての新たな女性像が生まれたと結論づけた。

引用文献

- 1) Ford, Elizabeth.: "How to Cocoon a Butterfly: in A Girl of the Limberlost." *Children's Literature Association Quarterly*. 18. 4. Winter, 148 (1993)
- 2) 同上
- 3) Welter, Barbara.: "The Cult of True Womanhood: 1820-2860." *American Quarterly*, 18. 2. 1. Summer, 151-174, 152 (1966) Welter 152
- 4) 前掲 1), 150
- 5) エリザベス・フォードは, "Stratton-Porter, also a "Bird Woman," a self-taught nature photographer and naturalist as well as writer, may here be intruding in her own text" と述べている。(前掲 1), 150)
- 6) 前掲 1), 150
- 7) 前掲 4)
- 8) Richards, Bertrand F.: *Gene Stratton Porter*. Boston: Twayne, 26 (1980)
- 9) 前掲 7), 30
- 10) 前掲 7), 31
- 11) 前掲 1), 150
- 12) 前掲 1), 152
- 13) Stratton-Porter, Gene.: *A Girl of the Limberlost*. Massachusetts: Applewood Books, 201 (2006)
- 14) 前掲 12), 212
- 15) 前掲 12), 211
- 16) 前掲 1), 148
- 17) 原作 293
- 18) 前掲 2), 163
- 19) 前掲 2), 152
- 20) LaHaie, Jeanne.: "Transforming Motherhood: E. Nesbit's Children's Fiction at the Fin de Siècle." *Crossing Textual Boundaries in International Children's Literature*. Ed. Lance Weldy. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, 410-430, 412 (2011)
- 21) 前掲 2), 152
- 22) 前掲 12), 333
- 23) ALA Book List, 6, 57, O (1909)
- 24) 前掲 22)
- 25) New York Times, 14:501, Aug. 21 (1909)
- 26) 前掲 12), 320
- 27) 前掲 12), 321
- 28) Alston, Ann.: *The Family in English Children's Literature*. London: Routledge, 44 (2011)
- 29) 前掲 12), 21
- 30) 前掲 2), 152
- 31) 前掲 12), 335
- 32) 同上
- 33) 前掲 7), 137
- 34) 前掲 12), ix